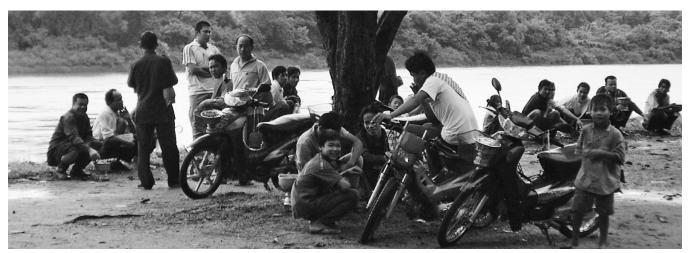
PROJECT

交錯する態度に臨む

岩佐光広

共同研究【若手】 ● 交錯する態度への民族誌的接近――連辞符人類学の再考、そしてその先へ(2010-2012)



ラオス低地農村部における仏教儀礼の際に、寺院の外側にいる人々。彼らは儀礼自体には「周辺的に」関わっているように見えるが、そこにはどのような「態度」 が読み取れるのか(2006年8月、岩佐光広撮影)。

本共同研究のねらいは、民族誌的研究がもつ魅力、つまりさまざまな当事者がそれぞれの立場や利害から現場に関わり、目的外の行為も含めて進行する出来事の全体性を捉えるという視点に立ち戻り、民族誌的記述の可能性について再検討を試みること、そして、そこから現代社会における人類学・民族誌学の意義について改めて問い直すことにある。本共同研究は2010年10月よりスタートしたばかりであるため、ここではキーワードとして注目する「態度」という概念に触れながら、共同研究の概要を紹介したい。

「応答性」からの出発

フィールドワークにおいて私たちはさまざまな出来事の現場に遭遇するが、そこでの人々の関わり方もまたさまざまである。主体的に物事に関わり、積極的に活動に取り組む人もいれば、周りの人の言葉に従い、消極的に関わる人もいる。少し距離をとり、物事の経過を静観している人もいる。さまざまな形での人々の関わりが交錯し、共鳴したり対立したりしながら出来事は進行していく。フィールドワークのおもしろさの一つは、出来事の現場における人々の関わり方の多様さに触れることである。

しかしながら、現場における人々の相互行為や協働実践が記述されるとき、そこにはある種のバイアスがあるように思われる。それは、生理学や心理学における刺激/反応の関係や、コミュニケーションにおける発信/受信の関係のように、主体的/従属的、能動的/受動的、積極的/消極的といった二項対立的な図式のもとで、その前者を基点とする傾向である。その傾向のもとでは、何らかの出来事が記述されるとき、主体的・能動的・積極的に行為している人々が主に取り上げられ、それ以外の人々は記述されないか、従属的・受動的・消極的なラベルを貼られて片づけられがちである。あるいは、従属的・受動的・消極的に見える人々の主体性を描き出すために、逆

に彼らの振る舞いが強調されて記述されることもある。

出来事の経過は、たとえば消極的に見えた人の突然の関与や、積極的な人の思わぬ断念などによって、予期せぬ展開をしばしば見せる。そうした出来事の流れを適切に記述するためには、人々の現場への関わりや他者との向き合い方を、上記の二項対立的な図式のように固定化して捉えるのではなく、むしろそのゆらぎに目を向けることが求められる。そのとき、先の記述のバイアスを意識的に見つめ直してみることもまた求められる。それは、出来事の現場における人々の関わり方の多様性をつぶさに調査することは言うまでもないが、同時にそれを記述する人類学者の側の認識論も問い直さなければならないということでもある。

そのための手掛かりとして注目するのが人々の「応答性」である。主体的・能動的・積極的に見える人であれ、従属的・受動的・消極的に映る人であれ、彼らを現場の状況や他者に絶えず「応えて」いる存在として、そして彼らの行為や実践を現場の状況がつきつけている何らかの要請に対する「応答」として捉え直してみたい。

応答性という言葉自体は必ずしも一般的ではないが、その関心は他の概念を用いながら検討されてきた。たとえば生態心理学では、「環境が、その中で生きる動物に与えてくれる行為の機会」を指す「アフォーダンス(affordance)」という概念を用い、人間や動物がアフォーダンスを環境の中で知覚し、それによって行動を調整しているものと理解することで、生物の認知や行動と環境との関係の捉え直しを試みている(三嶋 2000:10-11)。また、近年人類学でも関心が高まりつつある「ケア(care)」をめぐる議論では、ケアの与え手と受け手という役割関係からではなく、他者への配慮や共感という側面に注目しながら社会関係の生成について検討している(Kleinman and van der Geest 2009参照)。これらの議論には、人間の受動的な側面に注目することで、環境や他者との

関係を捉え直そうという意識を見ることができるが、本共同研究でもそうした意識を共有しつつ、応答性への注目を一つの出発点としながら、先の記述のバイアスを改めて問い直してみたいのである。

「態度」への注目

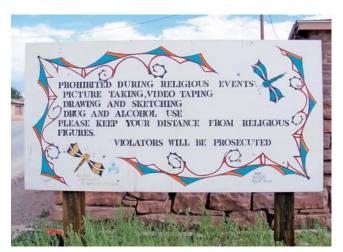
しかしながら人間の応答性を所 与のものとして捉えることは性急 である。それは、それぞれの社会 経済的条件や文化歴史的背景の中

で培われるものでもあり、同時に個々人の生きられた経験を通じて形作られるものである(武井 2009)。それゆえ、同じ場面であっても社会集団ごとに基本的な応答の仕方は異なるし、社会集団内でも年齢や性別、役割や立場によっても異なりうるものである。

こうした社会文化的に構築された応答性を、本共同研究では「態度」という概念で捉えてみたい。態度とは、事に臨むときの構え方、その立場などに基づく心構えや身構えを意味するとともに、物事に対したときに感じたり考えたりしたことが言葉・表情・動作などに現れたものも意味する。その点で態度とは、社会文化的に構築された応答性の具体的な場面での現れと位置づけることができよう。

たとえば、私が調査している事例では、ラオス低地農村部における看取りの過程において、身近な者の死と向き合う態度をめぐり、そこに携わる人々のあいだでやり取りが行なわれた。そこでは、「悲しむことは当たり前」ではあるが「悲しみすぎてはいけない」という、死にゆく者への感情的な距離の取り方、情緒的な応答の調整が一つのポイントとなる。そうした距離感は、看取りの場面に限らず、日常生活の人づきあいの端々に垣間見ることができるものでもある。応答性を所与のものとするのではなく、それを社会文化的に構築される態度として捉え、その相違性/相同性、多様性/均質性、可変性/硬直性に目を向けながら、現場における人々の相互行為や協働実践の記述の可能性を問うてみたい。

加えて、現場における人々の態度に目を向けるとき、人類



フィールドワークをする研究者に問われる「態度」。米国先住民保留地では、写真・動画撮影、スケッチ、メモ、録音などの記録行為が禁止となっていることが多い(2010年9月3日、伊藤敦規撮影、Zuni Tribe Photo Permit (2010/9/3))。



エチオピア政府主催の平和会合の場。長年戦いを重ねてきた紛争当事者が場をともにして、各演説者の話に聞き入る(2006年7月、佐川徹撮影)。

学・民族誌学においてはもう一つ問わなければならないことがある。それは「私たち(人類学者)の態度」である。フィールドワークにおいて現場に関わるとき、その当事者が私たちの態度を問うことがしばしばある。そのことは、フィールドワークにおける理論や方法論における重要な問題として繰り返し議論されてもきた。私たちは記述しようとする現場においてどのような態度をとってきたのか。その態度が人々の営みにど

のような影響を及ぼしたのか。そしてフィールドワークを行なう中で私たち自身の態度はどのように変化してきたのか。 態度という視点から見たとき、私たちもまたその現場に「応答する者」として捉え直してみる必要があり、私たち自身も含めた現場の記述が要請されるということでもある。

共同研究会の計画

以上の視点から本共同研究では、アジア・アフリカ・アメリカの諸社会における、さまざまな現場に集う人々の態度を取り上げる。それを具体的に検討するための事例として、以下のような報告を予定している。

インド西部における生命の誕生をめぐる実践と葛藤(松尾瑞穂) ベトナム北部における新宗教組織女性信者の「道徳」をめぐる態度(伊藤まり子)

タンザニア都市路上商人の商交渉に見る流れと澱み(小川さやか) エチオピア牧畜民の戦争経験と和解(佐川徹)

アメリカ南西部先住民の博物館資料をめぐる知識と情報の管理 (伊藤敦規)

チリ先住民マプーチェの「敬意」の示し方(工藤由美)

それぞれの社会文化的文脈に照らしつつ現場に関わる人々の態度を読み解き、通文化的視点からも考察を進めていくとともに、そこに関わる私たち人類学者の態度についても検討していくことが、本共同研究の基本的な作業となる。そこから、人々の態度が交錯する中で生起する現場の共時的な異種混淆性と、その以前/以降も含めた通時的な動態性に臨むことのできる民族誌的記述の可能性を探ることができればと考えている。

【参考文献】

Kleinman, Arthur and Sjaak van der Geest. 2009. 'Care' in Health Care: Rethinking the Moral World of Medicine. *Mediche Antropologie* 22(1): 159-179.

三嶋博之 2000『エコロジカル・マインド: 知性と環境をつなぐ心理学』日本 放送出版協会。

武井秀夫 2009 「ケアを考える」 『千葉大学人文社会科学研究』 19:1-17。

いわさ みつひろ

研究戦略センター機関研究員。専門は医療人類学、ラオス地域研究、生命倫理学。著書に『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』(鈴木七美・藤原久仁子との共編 御茶の水書房 2010年)、論文に「生命倫理学における民族誌的アプローチの重要性」(『生命倫理』19 2008年)など。